

## 記憶の発掘と「僕」という存在の確認

### —— 村上春樹短編小説「中国行きのスロウ・ボート」論 ——

関 氷水<sup>\*1</sup>・楊 炳菁<sup>\*2</sup>

#### 要 旨

「中国行きのスロウ・ボート」は村上春樹が創作した初めての短編小説である。この短編をめぐって、今までの研究は概ね〈中国〉、〈中国人〉のような固有名詞からアプローチし、解説を行なったが、主人公である「僕」がいかに中国人を認識するかに焦点を絞って、分析するものも少数でありながら存在している。記憶という角度から見れば、「中国行きのスロウ・ボート」は中国人に対する「僕」の認識を表現したものではなく、中国人の存在がいかに「僕」を変えたかことを表した小説と言っていだろう。つまり、中国人に関する話は「僕」に人の個性性と社会との関係を考えさせ、「僕」はそれを通じて自分の存在を確認したわけである。

〔キーワード〕 村上春樹、中国行きのスロウ・ボート、記憶、「僕」という存在

#### はじめに

1980 年に発表された「中国行きのスロウ・ボート」<sup>1)</sup>は村上春樹の初めての短編小説である。この短編をめぐって、多くの研究者は〈中国〉、あるいは〈中国人〉に注目し、その解説は、〈中国〉の意味、つまり国家・地域を表す<sup>2)</sup>かどうかによって大きく左右されると言えよう。筆者は「村上春樹小説における「虚」と「実」——「中国行きのスロウ・ボート」における「中国」——という論文で、小説に出た〈中国〉を考察し、以下のように指摘した。「中国行きのスロウ・ボート」における〈中国〉は国家・地域を指す時もあるが、多くの場合においては、国家・地域としての中国と無関係に使われている。小説のタイトルおよびエピグラフは共に *A slow boat to China* というアメリカの歌に由来したもので、“a slow boat to China”はアメリカ英語の俗語として、その言葉における“China”は実際の国家・地域ではなく、遠いところを指しているわけである。勿論「それでもその中国は、僕のためだけの中国でしかない。それは僕にしか読み取れない中国である。僕にしかメッセージを送らない中国である」など、〈中国〉に言及した部分からも、国家・地域を表していないことも分かる。<sup>3)</sup>

「中国行きのスロウ・ボート」における〈中国〉は国家・地域を表すものでない以上、いかに解説するかが自然に問題となる。つまり、〈中国〉、あるいは〈中国人〉のような記号だけではなく、いかに「正面切って解説する」<sup>4)</sup>かが必然的作業になると言っていだろう。だが、これは決して簡単なことではない。その難しさについて、阿部好一氏は次のようにまとめ、さらに必要性と可能性も強調する。

筆者の目にふれた範囲で言えば、評者たちの多くは一樣に、村上作品を正面切って読解する作業の不毛を説く。だが、読解にはたしかに困難がともなうが、全く意味がないとは筆者は思っていない。村上春樹の提示する記号の意味にこだわることによって、その世界の本質的一面が見え

\* 1：浙江外国语学院 東方語言文化学院 日本語学科

\* 2：北京外国语学院 日語学院(日本学研究センター)

てくることもあるはずである。<sup>5)</sup>

実際には、阿部好一氏の「村上春樹論の試み ― 短編二、三の解説をめぐって」は「正面切って解説する」試みの一つと言える。「戦後社会史あるいは年代記とでも呼びうるような歴史的な時間の流れとそれぞれの時代への批評性」<sup>6)</sup>を読み取った阿部氏は登場した三人の中国人に注目し、それぞれの時代において違和感を覚える異郷の人だと見ている。また、日本人の「僕」も同様に違和感を覚えたため、三人の中国人と同質だと論じた。

異郷に生きる中国人のアイデンティティで登場人物を捉えるなら、日本で暮らす外国人でさえあれば、誰でも異郷に生きる人だと言えるので、別に〈中国人〉と設定する必要はないと指摘したい。また、違和感を覚える異郷の人で、「僕」を三人の中国人と結びつけるのは極めて巧妙だと思われるが、内容との矛盾が看過できない。例えば一番目の監督官の場合、阿部氏は彼のことを「理想主義と呼んでいいような調子の高さ」<sup>7)</sup>と分析したが、「僕」らに「誇りを持ちなさい」と言い出した彼は日本に対して違和感を覚えていないようである。もしどうしても違和感で押さえるなら、むしろ監督官に対する「僕」の感情が適用だろう。要するに、一番目の中国人に限って言えば、異郷の人という結論は妥当ではないと言えよう。

阿部好一氏の論文はもし初期「中国行きのスロウ・ボート」論のうち、「正面切って解説する」ものの代表だと言え、近年こうした「正面切って解説」しようとする試みとして津久井秀一氏の「村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』試論」があげられる。津久井氏も〈中国〉と〈中国人〉の非実在性を認め、〈中国人〉を「この世界で〈孤立〉しながらも失いそうな〈誇り〉を切符のように握りしめ、懸命に生きる人々の総称」<sup>8)</sup>と見ている。そして、「僕」について、非正規な手段で彼らにおいつこうとしており、「遂に「中国人」に追いついてしまった」<sup>9)</sup>人と論じている。ここで津久井氏は、〈中国人〉のことを変化しつつある特定のグループだと見ているようである。だが、登場した中国人はそれぞれ同じ状況を示したか、それとも異なった状態が時間的に結ばれて、ある全体的状況を形成させたかについて明言していない。実際にはいずれの場合にしても通じないところがあると思われる。例えば一人目の監督官は誇りを示しただけで孤立の状態にある人とは言えない。それに対して、二人目の女子大学生は孤立した状態にあるが、誇りを持たないことは明らかである。また、百科事典を販売する三人目の中国人は特に誇りも孤立も示さなかったようである。言い換えれば、三人の中国人は同様に誇りから孤立へというような変化を示さず、異なる時期における違う境遇にある〈中国人〉の代表にもなれないわけである。また、津久井氏は〈中国人〉に追いつくために、「僕」は非正規の手段を取ったと論じたが、これも不適切な指摘だと言えよう。確かに単行本版の「中国行きのスロウ・ボート」においては、「僕」は中国人小学生の机に落書きをし、非正規の手段で〈中国人〉に追いつくと言え、追いつく対象は中国人小学生であり、監督官ではないことが明白である。つまり、津久井氏の指摘に従えば、「中国行きのスロウ・ボート」は三人の中国人の話によって構成されたものではなく、四人の中国人の物語になるわけである。ちなみに、落書きに関する描写は、『村上春樹全作品 1979～1989』に収録された際、削除された部分である。

以上は代表的な「中国行きのスロウ・ボート」論を考察したが、「正面切って解説する」論考は不十分だと言えよう。構造からいえば、「中国行きのスロウ・ボート」は「一種のリアム・タイムとしての「1」と「5」という額縁を持ち、それらは小説全体にたいしてメタ性を持つことを意味する」<sup>10)</sup>小説である。言い換えれば、「僕」のことを描いた「1」と「5」の部分は、小説全体を締めくくる役割を果たしているもので、残りの「2」～「4」の部分は「僕」の物語に挟まれたものとなっているのである。これについて、筆者は「村上春樹文学における「虚」と「実」―「中国行きのスロウ・ボート」における中国人」という論文で、次のように指摘した。

この短編の「1」と「5」はそれぞれ「僕」の人生思考の起点とたどり着いたある時点を意味し、これによって、「1」と「5」に挟まれた三章は「僕」の人生思考の過程となり、その思考はまさに中国人に頼っているのである。<sup>11)</sup>

中国人の〈虚〉と〈実〉に重点を置いたため、拙論は「僕」の思考に詳しく触れなかった。しかし「中国行きのスロウ・ボート」は「僕」のことを表現する小説ではないだろうか。つまり、「僕」のことを描く「1」と「5」は実は「僕」の変化を表す部分で、具体的には「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」と「ここは僕のための場所でもないんだ」という二句に集約されているわけである。このような「僕」の変化に挟まれた三人の中国人の話は、「僕」に何か意識させるもので、別に中国人に対して「僕」は何か認識したというものではないだろう。この点から言えば、阿部氏にしても津久井氏にしても、その論の焦点は「僕」がいかに中国人を認識するかというところにある。だが、「中国行きのスロウ・ボート」はむしろ逆で、三人の中国人が「僕」に働きかける力学によって描かれた小説と言えよう。したがって、もし「中国行きのスロウ・ボート」という小説を「正面切って解説する」なら、「僕」はなぜ変化し、三人の中国人は「僕」の変化にいかなる役割を果たすかを究明するのが問題の所在である。

## 1. 記憶というキーワード

簡単のように見える「中国行きのスロウ・ボート」には実は難解のところが多数存在している。特に「1」においては、その難解さはより顕著だと言えよう。しかし、小説のはじまりであるために、「1」における難問をクリアしないと「中国行きのスロウ・ボート」の全体像をうまく把握できないだろう。したがって、「正面切って解説」しようとするなら、「1」に描かれたことを詳細に分析すべきだと思う。

山根由美恵氏は『村上春樹研究事典』において、「中国行きのスロウ・ボート」における記憶の重要性を次のように指摘した。「読みのポイントになるのは、〈記憶〉の捉え方である。(中略)この〈記憶〉をいかに位置付けるかが「中国行きのスロウ・ボート」の価値に繋がるであろう。」<sup>12)</sup>確かに山根氏が指摘したように、「中国行きのスロウ・ボート」は中国人に出会う時間への疑問から始まり、「記憶の破片」を発掘するために、辛抱強く作業を続けた「僕」のことを描いた。これは当然記憶の重要性を訴えているが、肝心なのは記憶が何を意味しており、「僕」の発掘作業は何のためだったということであろう。

### 1.1 記憶と時間

ここで改めて「中国行きのスロウ・ボート」の冒頭部を見てみよう。

最初の中国人に出会ったのはいつのことだったろう？

この文章は、そのような、いわば考古学的疑問から出発する。様々な出土品にラベルが貼り付けられ、種類別に区分され、分析が行われる。

さて最初の中国人に出会ったのはいつのことであったか？

小説は時間に関する疑問から始まったが、面白いことに、この疑問は「考古学的」で修飾され、そして「様々な出土品…」という文句で考古学的作業を表現した。時間への疑問はなぜ「考古学的」で修飾され、考古学的作業は何を意味しているのか。いわゆる考古学は遺跡・遺構・遺物を考察することにより過去の人類の文化を研究する学問である。遺跡・遺構・遺物などが研究の対象なので、当然

時間の測定は考古学に属しているだろう。だが、歴史学も時間に関する考察が行われるので、なぜ「歴史学」ではなく「考古学」が強調されたのだろう。

この質問に答えるにはおそらく考古学の特徴を考察せねばならないと思われる。考古学の特徴として、まず考古学のデータは人間の営みが物質世界を変える結果であることが挙げられる。つまり人間の営みを含めたあらゆる痕跡は考古学の資料で、その資料はそれなりの価値を示したのは人類の思想及び目的を表現したからである。これを言い換えればつまり、考古学の資料を通して、当時の製造者及び使用者の思想や生活様式などがわかるからである。<sup>13)</sup> 考古学の二番目の特徴として、歴史学との相違点が挙げられる。つまり文字で記録された資料を研究対象とする歴史学に対して、考古学は遺存した実物を研究する学問である。また、富の占有者、権力者などに目を向けた歴史学と異なって、考古学は一部の人間ではなく、人類全体を研究するわけである。<sup>14)</sup> そして三番目の特徴は、完全たる人類の歴史を探究しようとするところにあり、そのため、考古学の研究範囲は文明の曙から最も偉大な成果まで、地球上のあらゆる地域にわたっていると言えよう。したがって、我々は考古学を通して、自分の過去がわかり、人類の形成や、我々はどこからきたのか、そして我々は何なのかなどについて答えられるのである。<sup>15)</sup>

以上のような考古学の特徴からわかるように、「最初の中国人に出会った…」という疑問は単なる時間への疑問ではなく、その背後に「僕」という普通の人間への疑い、言い換えればごく普通の一人として、「僕」はいかなる道を辿り、今のような者になったのかということに対する凝視である。このような疑問への回答は、「僕」は遺物のような記憶に頼っているため、そこで、「記憶の破片」を辛抱強く発掘し続けたわけである。

「最初の中国人に出会った…」という疑問は「考古学的疑問」であるため、図書館に行った「僕」は結局そこに入らずに「別れを告げた」。なぜなら、もし中国人との出会いが単なる時間のことを意味しているなら、それを「ヨハンソンとパターソンがヘヴィー・ウェイトのチャンピオン・タイトルを争った年」に取り換えればよからう。そして、その確認も簡単で、「図書館に行って古い新聞年鑑のスポーツのページを繰ればいいわけ」である。だが、「僕」は「正確な日付になんて誰が興味を持つだろうか」と「古い新聞年鑑と僕のあいだに、これ以上お互いに分かち合うべき何が存在するだろうか」という二つの理由で、その調査を諦めた。言い換えれば、「最初の中国人に出会った…」は時間に関する疑いではなく、「考古学的疑問」なので、それを解決するには記憶の発掘にしか頼らないということである。

中国人との出会いは単なる時間のことを意味していないのは「僕」の行為から読み取れるが、図書館を後にした「僕」の理由は難解なものとは言えよう。ここで、記憶と図書館の関係について触れたい。金瑛氏は「集合的記憶概念の再考」において、アルヴァックスの記憶を支える空間の「枠組み」について、次のように紹介した。

過去からの連続性を空間の「枠組み」が支えるのはなぜだろうか。それは第一に、過去の痕跡を物質的にとどめる空間が、過去との連続性を安定したものとして表象するからである。(中略) だが一方で、物理的空間だけでは人間にとっての「根本的な所与」とはなりえないとも述べられている。(中略)、図書館で書物を参照したり、博物館で遺物を見たりすることで人は過去を知ることができる。だがそれは、碩学の好奇心や骨董品に対する趣味に動かされた結果でしかないと言われる。<sup>16)</sup>

アルヴァックスは記憶という角度から図書館と博物館について以上のように結論を下したが、その前提として、「個人であれ集団であれ、思い出す主体が、連続して運動している自らの思い出にまで

遡っていると覚えることが記憶の存在に必要な条件」<sup>17)</sup>である。したがって、記憶の角度から言えば、図書館は単なる過去の知識を保存する場所で、たとえ人の記憶を保存する図書があっても、図書の利用者にとっては他人の、あるいは集団の記憶に過ぎない。そのような記憶は利用者自身の記憶には結ばれないがゆえに、過去から現在までの連続性を形成させないわけである。

図書館と記憶の関係から考えれば、図書館を去った「僕」の理由がわかると思われる。確かに図書館に行けば簡単に「最初の中国人に出会った…」という問題を解決できるが、それは時間の確認に過ぎず、客観的な事実を得ることを意味しているである。だが、「僕」は「考古学的疑問」を持っており、考古学的作業も行う。記憶を発掘することが「僕」の目的なので、時間の確認は記憶そのものには大した役割を果たせないだろう。したがって、「僕」は「正確な日付になんて誰が興味を持つだろうか」という結論にたどり着いた。また、図書館に保存された資料は読者との間に過去から現在までの連続性を形成させないために、「古い新聞年鑑と僕のあいだに、これ以上お互いに分かち合うべき何が存在するだろうか」という考えも生まれたのであろう。要するに、「僕」の「考古学的疑問」および考古学的作業は記憶が焦点で、これによって「僕」は年鑑調査を放棄したわけである。

## 1.2 記憶と「僕」

図書館の開館を待つ間年鑑調査を諦めた「僕」の描写を通じて、「中国行きのスロウ・ボート」は記憶と時間の関係、および記憶にとって図書館の無力さを表現した。一方、年鑑調査を諦めた「僕」は自分の記憶について次のように告白した。

たいていの僕の記憶は日付を持たない。僕の記憶力はひどく不確かである。それはあまりにも不確かなので、ときどきその不確かさによって僕は誰かに向って何かを証明しているんじゃないかという気がする。しかしそれが一体何を証明しているかということになると、僕にはまるでわからない。

「僕の記憶は日付を持たない」というのは、前述の記憶と時間の関係と呼応しているが、問題なのはなぜ自分の記憶力の不確かさを強調し、また「誰かに向かって何かを証明している」という文句における「何か」は何を指すのだろうか。ここでアルヴァックスの論に再び触れたい。アルヴァックスは集合的記憶について次のように論じている。

内部から見られた集団こそが集合的記憶である。問題となっているのは過去なのだから、集合的記憶が集団に対して描き出すのは、継起するイメージのなかに集団が自らの姿を認められるような仕方で、時間のなかで展開する集団それ自体を描いた絵画である。<sup>18)</sup>

集合的記憶に関するアルヴァックスの論述は同様に個人的記憶にも適応できると思われる。つまり、個人的記憶が個人に対して描き出すのは、継起するイメージのなかに個人が自らの姿を認められるような仕方であるということである。したがって、もしアルヴァックスの論述で「僕」の告白を考察すれば、「記憶力がひどく不確か」が意味することは、「僕」が継起するイメージを形成させないということになると思われる。したがって「僕は誰かに向って何かを証明している」というのは、逆説的に「僕」が自らの姿を認められないことを意味しているだろう。

「僕」は継起するイメージを形成させず、自らの姿を認められないが、辛抱強く記憶を発掘する「僕」は実は自らの姿を認めようとして努力していると思われる。したがって、記憶に関する告白の後、「僕」は小学校時代をとおして「きちんと正確に思い出すことのできる」二つの出来事に言及し、その時に

言った「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」ということばを頭にとどめながら、「僕という一人の人間の存在と、僕という一人の人間が辿らねばならない道について考えてみる」のである。

ここで、注意したいのは「僕」が使った「思い出す」という言葉である。過去のことや、忘れていたことを思い浮かべるのは「思い出す」の定義で、思い出されたものは当然思い出になるだろう。ただ、思い出そのものは決して記憶とは言えず、なぜなら、ここでいう記憶は忘れずに覚えているという意味合いではないので、思い出された内容としての思い出もとても記憶とは言えないだろう。したがって、「僕」の思い出したことは「記憶の破片」に過ぎず、より多くの「記憶の破片」を発掘し、それを一つのまとまったものに繋いで始めて記憶を形成させるわけである。

記憶の角度から言えば、「中国行きのスロウ・ボート」は「僕という一人の人間」の姿を認める小説である。ただ、ここでもう一点注意したいのは「僕という一人の人間」の背後に隠された意味のことである。

柄谷行人氏『探求Ⅱ』において、次のように論じたことがある。

私は十代に哲学的な書物を読み始めたころから、いつもそこに「この私」が抜けていると感じてきた。哲学的言説においては、きまって「私」一般を論じている。それを主観といっても実存といっても人間存在といっても同じことだ。

(中略)

私はここで、「この私」や「この犬」の「この」性 this-ness を単独性 singularity と呼び、それを特殊性 particularity から区別することにする。(中略)単独性は、特殊性が一般性からみられた個性性であるのに対して、もはや一般性に所属しようのない個性性である。<sup>19)</sup>

単独性から考えれば、「僕という一人の人間」は柄谷行人氏の言った「この私」にあたる。なぜならそれは一般的な「一人の人間」ではなく、「僕」という代え難い人間のことが強調されているからである。したがって、「中国行きのスロウ・ボート」は「記憶の破片」によって、自分の単独性を確認する小説とも言えよう。「僕」は継起するイメージを形成させないゆえに、「記憶の破片」を発掘するわけである。その「記憶の破片」は三人の中国人の話で、「僕」はそれによって、自らの姿を認められるのである。そこで「僕」は大きな変化が起こり、その変化は自分の単独性が確認できた証拠になるであろう。果たして、「中国行きのスロウ・ボート」における残りの部分は以上のように展開されているのだろうか。

## 2. 三人の中国人の話

もし「中国行きのスロウ・ボート」は「僕」が自分の「記憶の破片」を通じて自分の単独性、言い換えれば自らの姿を確認する小説であるなら、思い出された三人の中国人の話は「僕」が発掘した「記憶の破片」であり、それによってある継起するイメージを形成させるはずである。ここで三人の中国人の話を考察し、「僕」が読み取れたものについて分析したい。

### 2.1 中国人の監督官

一人目の中国人はある中国人小学校の先生で、「僕」が参加する試験の監督官である。試験が始まる前に、彼は「僕」を含めた生徒の前で次のように話した。

「……中国と日本は、言うなればお隣り同士の国です。みんなが気持ち良く生きていくためには

お隣り同士が仲良くしなくてはいけない。そうですね？」

(中略)

「もちろんわたくしたち二つの国のあいだには似ているところもありますし、似ていないところもあります。(中略)どんなに仲の良い友だちでも、やはりわかってもらえないこともある。(中略)でも努力さえすれば、わたくしたちはきっと仲良くなれる、わたくしはそう信じています。でもそのためには、まずわたくしたちはお互いを尊敬しあわねばなりません。」

監督官の話したのはいうまでもなく日中両国の関係をめぐるものである。この発言のためか、「中国行きのスロウ・ボート」を中国および中国人に対する村上春樹の感情とみなす研究者は少なくない。だが、これは研究者たちの解釈に過ぎず、その場に臨んだ「僕」には必ずしも同様にそう思っているとは言えない。実際には、この監督官への回想の後、「僕」は自分の高校を思い出しており、中国人について、次のように述べた。

中国人といっても、べつに我々とどこかが変っているわけではない。また彼らに共通するはっきした特徴があるわけでもない。彼らの一人一人は千差万別で、その点においては我々も彼らもまったく同じである。僕はいつも思うのだけれど、個人の個性の奇妙さというのは、あらゆるカテゴリーや一般論を超えている。

一人目の中国人の話をした後、「僕」が考えたのは日中両国の関係ではなく、人の個性である。言い換えれば、中国人の存在は国のことではなく、人間同士のことを「僕」に考えさせたわけである。そして、人間同士の違いは決して国の違いに由来したものではなく、人の個性に決定されたものと言えよう。さらに「個人の個性の奇妙さというのは、あらゆるカテゴリーや一般論を超えている」という表現も、柄谷行人氏の論じた単独性 — 一般性に所属しようのない個性性と合致していると言えよう。

したがって、もし単独性という視角で改めて監督官の発言を考察すれば、おそらく彼は「僕」を含めた生徒に次のようなメッセージを伝えたがっていると思われる。一、人間は単独性を属性とするものであるがゆえに、たとえ互いに理解しあっていなくても、相互の尊重をすべきである。二、「顔を上げて胸をはりなさい」「そして誇りを持ちなさい」という表現からわかるように、生きている人間そのものが単独性を有する証拠となり、その単独性を珍重すべきだけでなく、誇りも感ずるものである。

## 2.2 中国人の女子大学生

二番目の中国人の話は「僕」とある中国人の女子大学生との思い出である。「僕」はバイト先で彼女と知り合いになり、別れの際、彼女を逆回りの山手線に乗せた。間違いを悟り、駒込駅に戻った彼女に再会したが、今度は彼女の電話番号を書いてあった紙マッチを捨ててしまった。以上の展開について、一部の研究者は中国人に対する「僕」の傷つけと解釈している。だが、小説を読めば分かるように、彼女は確かに中国人だと設定されているが、中国には行ったこともないし、日本で進学したので、ほとんど中国語もできない。英語が上手な彼女は将来通訳になりたがっているようだが、勿論これも中国と無縁なものである。つまり彼女に関するあらゆる情報は、中国人としてのアイデンティティを強化するどころか、むしろ中国との関連性を否定すると言っているだろう。一方、彼女に対する「僕」の行為は傷つけとは言えるが、これは決して「僕」に限って彼女に与えた傷つけではないと思われる。なぜなら、駒込駅で彼女と再会するとき、彼女は「こんなのこれが最初じゃないし、きっと最後でも

ないんだもの」と喋ったからである。

実は彼女が傷つけられる根本的な原因は中国人という身分に由来したものではなく、周りと異なる彼女の個性性にあると言っていいだろう。例えば「僕」は彼女の仕事を次のように評したことがある。

僕の熱心さと彼女の熱心さは根本的に質の違うものであるような気がした。つまり、僕の熱心さが「少なくとも何かをするのなら、熱心にやるだけの価値はあるかもしれない」という意味あいで熱心さであるのに比べて、彼女の熱心さはもう少し人間存在の根本に近い種類のものであるように見えた。(中略)彼女の熱心さには、彼女のまわりのあらゆる日常性がその熱心さによって辛うじてひとつにくぐられ支えられているのではないかといったような奇妙な切迫感があった。だからおかたの人間は彼女と仕事のペースがあわなくて、途中で腹を立てた。

彼女の仕事ぶりは彼女の個性性をよく反映したと思われる。一言で言えば、仕事している彼女は他の人から見ればあまりにも熱心で、その熱心さは彼女の存在さえ関わっているものである。したがって、彼女の存在自体は他の人に切迫感を与え、腹をたてることも容易に想像できる。自分の存在と関わっている熱心さは、言うまでもなく彼女の個性性に由来しており、その背後に単独性に対する彼女の執着が窺わせる。

個性性(単独性)に対する執着があるために、彼女は今まで何回も傷つけられる。その執着を放棄すれば周りとの関係が緩和し、今まで抱いた問題も解決できると思われるが、興味深いことに、彼女は「そもそもここは私の居るべき場所じゃないのよ。ここは私のための場所じゃないのよ」と嘆いた。この嘆きから妥協せず、個性性(単独性)を堅持しようとする彼女の姿が窺わせる。以上の分析から分かるように、「僕」は二番目の中国人の話を通じて、おそらく次のようなことを悟ると思われる。個性性(単独性)への執着は傷つけられるもので、それを堅持するなら、容易に世の中で生きられないだろう。

## 2.3 中国人のセールスマン

三番目の中国人の話は「僕」と高校時代の知り合いの中国人との出来事である。内容から見れば、日中関係からこの話を解釈し難く、そして「僕」は終始受動的な立場にあるため、三番目の中国人に何も働きかけなかったと言えよう。だが、もし人の個性性から見れば、三番目の中国人はまさに個性性を失った状態を表していると言っていいだろう。

まず三番目の中国人の仕事を見てみよう。三番目の中国人はセールスマンで、百科事典を売っているのである。百科事典とはあらゆる自然的・人工的な事物、現象、事項および行動に関して解説を行い、さらに具体的に理解を助けるために挿画、地図、写真、図、表などを添えて、それらの項目を五十音(またはイロハ順)あるいはアルファベット順に配列した事典のことである。本質からいえば、百科事典は図書館と類似的で、いずれも一定のルールに従って各方面の知識を一つのシステムに網羅するものである。知識そのものは主体性を持っていない。百科事典はまさにそのような知識をシステムに組み入れる具現だと言えよう。三番目の中国人は以上のような性質を有するものを販売する人で、さらに販売という仕事のため、彼が会おう人のほとんどは初対面の人かもしれない。初対面、且一回のみの交渉であるがゆえに、特に相手のことを知る必要はないだろう。これは二点目に分析したい名前と深く関わっている。

「僕」と三人目の中国人とのやりとりの中で、次のような会話がある。

「名前を教えてもらえないかな。どうしても思い出せないし、思い出せないと気持ちが悪いん

だ」と僕は言った。

「名前なんてどうでもいいんだよ、本当に」と彼は言った。「(中略)でももし君が俺の名前を思い出せなくてそんなに気になるのなら、俺のことを初対面の相手だと思えばいいよ。それだってべつに話をするのに支障はないんだから」

世間話のように淡々と名前のことを話し合ったりするが、個体の存在と深く関わっている興味深い会話だと言えよう。前掲の『探求Ⅱ』においては、柄谷行人氏は単独性と固有名について、次のように論じたことがある。「あるものの単独性は、われわれがそれを固有名で呼ぶかぎりでのみ出現する。固有名は、たんに個体に対する命名ではない。それは「個体」をどうみるかにかかわっている。」<sup>20)</sup> 柄谷氏の論述によれば、我々はある物事の固有名を通じてその物事の単独性を認識しているが、より厳密に言えば、固有名こそ我々の認識を反映するものである。勿論、人の名前は固有名かどうかについてさらなる議論が必要であるが、一般的には、名前を通じて相手の単独性を認識するわけである。したがって、「僕」が相手の名前を「思い出せないと気持ちが悪」くなるのは、相手の単独性を確認する方法を失ったためである。それに対して三人目の中国人は「名前なんてどうでもいい」と思っていて、それは彼の仕事が相手の単独性を知る必要はないということを反映しているからである。百科事典を販売する彼は、相手の単独性を知らない前提でいかに話すかに慣れていて、「俺のことを初対面の相手だと思えばいいよ。それだってべつに話をするのに支障はないんだから」と言った所以である。

個性性が喪失した状態の証拠として、記憶に関する彼の発言も挙げられる。「どういう経緯で中国人相手に百科事典を売り歩くような羽目になった」かについて、三人目の中国人は次のように言った。「もちろんひとつひとつの細かい事情は思い出せるんだけどね、それがひとつに結びついてこういう方向に流れていくという、全体的なものが見渡せないんだ」。もし記憶が個人に対して描き出すのは、継起するイメージのなかに個人が自らの姿を求められるような仕方で、時間のなかで展開するそれ自体を描いた絵だとすれば、三人目の中国人は明らかに記憶を形成させなかったのである。なぜなら、各出来事を覚えていながら時間のなかで展開できず、当然まとまった絵にはなれないからである。これを言い換えればつまり、たとえ彼はどれだけはっきり過去の出来事を覚えていても、それはただ過去の再現であり、真の記憶とは言えないのである。

以上の三点から、個性性を失った三人目の中国人が浮き彫りになった。ただ、個性性を失った彼は、ごく普通に生活しており、二人目の中国人女子大学生のように「ここは私のためのところではない」と考えていないようである。これは個性性への執着度が社会との関係を反映し、言い換えれば、個性性に執着するかどうかは、どれほど社会に同調するかと深く関わっているのである。

以上は三人の中国人の話に関する考察である。これらは異なった時期における「僕」の思い出であるが、発掘された「記憶の破片」として、人の個性性に結びつけられ、連続性のある「僕」の記憶になったと言えよう。具体的に言えば、小学校時代の「僕」は、人の存在は個性性によって現れており、その個性性に対して、たとえ理解しなくても、尊重すべきなものだとわかった。そして大学時代になると、「僕」は人の存在は個性性によって現れたことがわかっていても、現実における個性性への執着は容易なものではないと感じた。また 28 歳になった「僕」は、個性性への執着を放棄するこそ、この世でうまく生きられる条件だと悟った。

## おわりに

記憶は自体を描いた絵画のようなものなので、繋がれた三つの思い出は「僕」の記憶となり、結局「僕」のことを表現していると言えよう。ここで小学校時代を通して「僕」が「きちんと正確に思い出す」もう一つの出来事に触れながら詳しく説明したい。

前述のように「中国行きのスロウ・ボート」の「1」と「5」を通じて、「僕」の変化を読み取れるが、その変化は具体的には「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」と「ここは僕のための場所でもないんだ」という二句に集約されている。実は「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」は、脳震盪から目が覚めた時に「僕」が言った言葉で、その脳震盪を起こした野球試合はまさに小学校時代をとおして「僕」が「きちんと正確に思い出すことのできる」もう一つの出来事である。そして、30歳を超えた今、「僕」は同じ場面を想像し、異なる言葉――「ここは僕のための場所でもないんだ」と言うのを想像した。当然のことであるが、このような変化は記憶の形成と無縁ではなく、「僕」は自分の姿を認めたから起こったのであろう。

「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」という文句には現実に対する妥協が含まれており、言い換えれば、自分の個性を抑え、欠陥のある現実を受け入れることを意味していると言っていいたいだろう。一方、浅利文子氏は「村上春樹の中国：『中国行きのスロウ・ボート』という視点から」において、次のように解釈した。

「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」という言葉を強調する意味は、「埃」が「誇り」と同音語という点にある。「埃」は2章の中国人教師が日本人小学生に説く「誇り」と、ラスト・シーンで「中国行きのスロウ・ボートを待とう」と語る「僕」が抱く「ささやかな誇り」と同音なのである。<sup>21)</sup>

「誇り」と「埃」は同音語であるから「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」と設定されたかどうか不明だが、もし浅利氏の指摘したようなものなら、自分の個性性にこだわらなければ生き続けられるという意味となり、その言葉には明らかに個性性と個人の存続との対立が含まれていると思われる。一方、30歳を超えた現在では、「僕」は「ここは僕のための場所でもないんだ」と口にしたい。「ここは僕のための場所でもないんだ」には現実に対する妥協がなく、二人目の中国人と同様に、個性性(単独性)を徹底的に守りたいという強い気持ちが窺わせる。「大丈夫、埃さえ払えばまだ食べられる」から「ここは僕のための場所でもないんだ」へ、こういう変化があるからこそ、「僕」は個人の夢を満載した中国行きのスロウ・ボートに乗ろうとしただろう。

初めての短編としての「中国行きのスロウ・ボート」は、「記憶の破片」を発掘することを通じて、継起するイメージを属性とする記憶を形成させ、「僕」という人間の存在を確認する小説だと言えよう。記憶、個性性、名前など、「中国行きのスロウ・ボート」に出た諸要素は後の村上春樹文学において絶えず現れており、深みのある代表作によって巧みに表現された。こういう意味から言えば、「中国行きのスロウ・ボート」は短編でありながら、短編の意味を大いに超えた村上春樹文学の一つの出発点と言えよう。

#### 使用するテキスト

村上春樹(1990)『村上春樹全作品 1979-1989 ③ 短編集 I』、講談社、pp11～39

#### 注

<sup>1)</sup> 「中国行きのスロウ・ボート」は何回も改稿されたが、本稿は原則として改稿の問題に触れない。

<sup>2)</sup> 〈中国人〉に対する理解は〈中国〉の理解と関わっていると思われる。つまり、もし〈中国〉を国家・地域の概念として理解すれば、小説に登場した〈中国人〉は自然に国家・地域の代表として理解している。逆にもし〈中国〉

を国家・地域の概念として理解していなければ、〈中国人〉も自然に国家・地域と関係なくただ何か役割を果たす存在になる。いかに〈中国人〉を理解すべきかについて、拙論「村上春樹小説における「虚」と「実」——「中国行きのスロウ・ボート」の中国人について」（『東アジア文化交渉研究』第 13 号、関西大学大学院東アジア文化研究科、pp433-443）に詳しい。

- 3) 関氷氷、楊炳菁(2016)「村上春樹小説中の“虚”與“實”——論《去中國的小船》中的“中國”」『國際漢學』第 3 期、外語教學與研究出版社、pp152-157
- 4) 阿部好一(1989)「村上春樹論の試み——短編二、三の解説をめぐって」『神戸学院女子短期大学紀要』22 号、神戸学院女子短期大学、p1
- 5) 同注 4)p1
- 6) 同注 4)p9
- 7) 同注 4)p4
- 8) 津久井秀一(2015)「村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』試論：〈非正規〉な記憶への「放浪」あるいは「冒険」」『宇大国語論究』第 26 号、宇都宮大学国語教育学会、p28
- 9) 同注 8)p27
- 10) 同注 4)p2
- 11) 関氷氷、楊炳菁(2020)「村上春樹小説における「虚」と「実」——「中国行きのスロウ・ボート」の中国人について」『東アジア文化交渉研究』第 13 号、関西大学大学院東アジア文化研究科、p443
- 12) 村上春樹研究会(2007)『村上春樹作品研究事典』、鼎書房、p125
- 13) 戈登(2008)『考古學導論』、上海三聯書店、pp3-4
- 14) 羅伯特(2009)『發現我們的過去 考古學』、世紀出版集團 上海人民出版社、pp22-23
- 15) 同注 14)p7
- 16) 金瑛(2012)「集合的記憶概念の再考：アルヴァックスの再評価をめぐって」『フォーラム現代社会学』第 11 号、関西社会学会、p8
- 17) 同注 16)p6
- 18) 同注 16)p6
- 19) 柄谷行人(1989)『探求Ⅱ』、講談社、pp9-10
- 20) 同注 19)p25
- 21) 浅利文子(2010)「村上春樹の中国：『中国行きのスロウ・ボート』という視点から」『異文化 論文編』第 11 号、法政大学国際文化学部、p257

## 参考文献

- 浅利文子(2010)「村上春樹の中国：『中国行きのスロウ・ボート』という視点から」『異文化 論文編』第 11 号、法政大学国際文化学部、pp253-266
- 阿部好一(1989)「村上春樹論の試み——短編二、三の解説をめぐって」『神戸学院女子短期大学紀要』22 号、神戸学院女子短期大学、pp1-13
- 柄谷行人(1989)『探求Ⅱ』、講談社
- 金瑛(2012)「集合的記憶概念の再考：アルヴァックスの再評価をめぐって」『フォーラム現代社会学』第 11 号、関西社会学会、pp3-14
- 関氷氷、楊炳菁(2016)「村上春樹小説中の“虚”與“實”——論《去中國的小船》中的“中國”」『國際漢學』第 3 期、外語教學與研究出版社、pp152-157
- 関氷氷、楊炳菁(2020)「村上春樹小説における「虚」と「実」——「中国行きのスロウ・ボート」の中国人について

- て」『東アジア文化交渉研究』第13号、関西大学大学院東アジア文化研究科、pp433-443
- 津久井秀一(2015)「村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』試論：〈非正規〉な記憶への「放浪」あるいは「冒険」
- 『宇大国語論究』第26号、宇都宮大学国語教育学会、pp16-28
- 村上春樹研究会(2007)『村上春樹作品研究事典』、鼎書房
- 戈登(2008)『考古學導論』、上海三聯書店
- 羅伯特(2009)『發現我們的過去 考古學』、世紀出版集團 上海人民出版社

## Unearthing Memory and Confirming the Existence of ‘I’ — Haruki Murakami on His Short Story *A Slow Boat to China* —

GUAN, Bingbing · YANG, Bingjing

*A Slow Boat to China* is the first short story created by Haruki Murakami. While most of the studies on this short story have approached and deciphered the story from the perspective of proper nouns such as “China” and “Chinese”, a small number of studies have focused on how “I”, the main character, perceives the Chinese people. From the perspective of memory, *A Slow Boat to China* is not an expression of “I”’s perception of the Chinese, but a novel about how the existence of the Chinese changed “I”. In other words, the story about the Chinese changed “I”. In other words, the story about the Chinese made “I” think about the relationship between individuality and society, through which “I” confirmed my existence.

**Keywords:** Haruki Murakami, *A Slow Boat to China*, Memory, the Existence of ‘I’